

中学時の特別活動の参加経験と学級生活の関連性に関する検討 —— 全国の大学生を対象にした質問紙調査の分析から ——

鈴木 翔・岡邑 衛・歌川 光一・中村 豊

A Study on the Relationship between Participating in Extracurricular Activities and
Class Room Experiences in Junior High School Days:
Results from a National Survey of University Students

Sho SUZUKI, Ei Okamura, Koichi UTAGAWA, Yutaka NAKAMURA

1. 問題の所在

特別活動は、教育課程を定めている学習指導要領に教科外教育として位置付けられた授業（学級活動・ホームルーム活動）と児童会活動・生徒会活動、クラブ活動（小学校のみ）、学校行事から構成されているほか、朝の始業前や始業後などに10分程度の短時間で行われる活動、清掃活動や給食等の当番活動、学級内の係活動等も含められている¹⁾。この特別活動の特質は、「なすことによつて学ぶ」ことおよび集団活動を指導原理とした教科書のない学習活動という点に見出すことができる。

佐々木（2014）は、『学習指導要領』にこれまで記載された特別活動の目標を特別活動の概念と考えてもよいこととしており、2017年（平成29年）に改定された最新版の『中学校学習指導要領』（文部科学省2017）では、特別活動の目標の見直しについては、以下のように解説されている^{2) 3) 4)}。

特別活動は、様々な構成の集団から学校生活を捉え、課題の発見や解決を行い、よりよい集団や学校生活を目指して様々に行われる活動の総体である。その活動の範囲は学年、学校段階が上がるにつれて広がりをもっていく、そこで育まれた資質・能力は、社会に出た後の様々な集団や人間関係の中で生かされていくことになる。

つまり、「学年、学校段階が上がるにつれて広がりをもつ」特別活動は、小学校、中学校、高等学校と同名称で実施される12年間の教育活動であり、今回改定された特別活動の目標は「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の3つの視点から「資質・能力の三つの柱」に沿って整理されているものと解釈できる⁵⁾。

しかしながら、目標に示された学習過程「様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して」が、義務教育最終段階である中学生に対し、具体的にどのような資質・能力の育成を目指しているのかは明確ではない。

また、学習指導要領並びにその解説には、小学校段階で養成された資質・能力と中学校段階の資質・能力との関係、さらには高等学校段階の資質・能力とどのように繋がっていくかなど、児童生徒の発達の段階に応じた資質・能力は示されていない。このことを問題として佐々木ら（2013）は、特別活動における発達課題の研究に関して、下記の点を課題として挙げている⁶⁾。

- ・現行の小、中、高等学校の学習指導要領の特別活動と解説を特別活動の育む能力、態度の視点から整理し、課題を検討するとともに、各段階別特徴と課題をあげることができたが、これらを踏まえて今後どのようにすべ

きかという具体的な提言までには至らなかった。

- ・特別活動全般の発達段階モデルの作成を目指したが、試案にとどまり、完成までには至らなかった。

- ・特別活動が育む能力、態度の評価表作成と学級集団の変容の検証を行ったが、この評価表の評価項目の検討など、さらに精度を上げるための検討が必要である。

学習指導要領が大きく改訂され、学校種別毎に順次施行される現在では、特別活動において育まれる資質・能力や発達課題などについて、改めて検証していくことが求められている。

これらの課題解決に向けて、本稿では、特別活動への参加経験が、学級生活を基盤とする集団活動並び人間関係づくりの関連について、大学生を対象とした質問票調査の分析から検討を行ってきたい。

(中村 豊)

2. 先行研究の検討

では、前節で述べた点について、先行研究はどのようなことを明らかにしてきたのだろうか。またそれら一連の研究の課題はどのようなところにあったのかをまとめておきたい。

特別活動によって獲得される資質・能力に関する研究は、大きく分けて2つに大別される。まず、学習指導要領や先行研究等を拠りどころとし、特別活動を通して児童生徒によって獲得される資質・能力を演繹的に示した研究がある（たとえば、山本・藤田（2015）、林・安井・鈴木（2018）など）。だが、そもそも学習指導要領に記されている資質・能力は、各学校の実態に応じて具体的に設定できるよう、汎用性の高い記述がなされているため、その内容はきわめて抽象的・理念的であり、これらの研究は実際に特別活動によって児童生徒に獲得される資質・能力を捉え切れてはいない可能性がある。

また、大学生や児童生徒を対象とした質問紙調査によって、特別活動で獲得される資質・能力を帰納的に導き出そうとする研究がある。議論を先取りすれば、本稿もまた以下の述べる研究の一群に位置づくことになる。これらの研究は、前者に

比べ数が少ないのが現状であるが、その中から先行研究を確認していきたい。

まず、大学生108名を対象に実施した中村（2010）の調査研究が挙げられる。この研究は、小学校、中学校、高等学校それぞれにおける「話し合い活動」「儀式的行事」「学芸的行事」「健康安全・体育的行事」「遠足・宿泊的行事」「勤労生産・奉仕的行事」を通して身につけられたと思われる資質・能力についての自由記述を分析したものである。さまざまある特別活動の内容を一纏めに扱わずに、内容を6つに区別している点で独自性を持った研究といえる。

ここでは、基礎的な集計結果とそれに対する簡単な考察にとどまっていたのだが、中村（2011）ではさらに分析を発展させ、6つの内容に共通する資質・能力について12項目（「発表・表現力」「責任感・役割遂行力」「協調性・協力する力」「リーダーシップ」「人間関係・社会的スキル」「規律・マナー・集団行動」「福祉・環境活動への奉仕」「創造・企画力」「意見をまとめる力」「聞く力」「キャリア形成」「その他」）にまとめている。さらに、これらの資質・能力の獲得には学校種による違いがあることを明らかにしている。すなわち、小学校では「話し合い活動」において「発表力・表現力」「意見をまとめる力」が獲得されたと考える回答の割合が高く、中学校では「勤労生産・奉仕的行事」において「責任感・役割遂行力」「人間関係・社会的スキル」の割合が高いことが示されている。また、その背景には学校種別の取り組み内容の違いがあることが言及されている。しかし、筆者も指摘するように無記入回答も多く、サンプルサイズが少ないことに限界があることや、これらは各活動を通して獲得したと認識されている資質・能力であるため、その因果関係については特定できない。

また、同調査において、本研究が注目する諸能力に関する項目（「はっきりと言うことができる」「他の人への配慮ができる」「根拠・理由を添えて伝えることができる」）も設定されているが、基礎的な集計結果の提示に留まり、これらと特別活動の項目との関係性については言及されていない。

つぎに、特別活動で育まれる資質・能力を児童生徒に対する質問紙調査によって明らかにしよう

とした研究として木内（1999, 2007）, 中村（2015）が挙げられる。まず、これらは調査対象者が、実際に特別活動を行っている児童生徒であり、大学生を対象とした想起法による調査ではない点において、上述の先行研究と区別することができる。まず、木内（1999）は高校生 194 名を対象とした質問紙調査により、「合意形成する力」に着目し、特別活動で育成される資質・能力として 4 つの因子、すなわち「創作性」「自己表出性」「仲間受容性」「総意性」を抽出している。また、中村（2015）は小学校、中学校、高等学校の児童生徒 3,794 名を対象とした質問紙調査により、「社会的能力」に着目し、特別活動で育成される資質・能力として 6 つの因子、すなわち「集団活動」「話し合い活動」「学級共同性」「自尊感情」「共感性」「人柄」を抽出している。これらの研究が本研究に与える示唆は大きいものの、たとえば、質問項目が必ずしも資質・能力とは関係ないものを含んでいたり（たとえば「私は、来年（いつまでも）もこの学級が続けばいいなと思います」（中村 2015）など）、木内（2007）も指摘するように、特別活動との関連において、実証性に課題が残る。そこで、本研究では以上の先行研究の課題を引き継ぎ、児童生徒のコミュニケーション能力を獲得する場だと考えられる学級生活に着目し、特別活動によって獲得すると考えられる資質・能力と特別活動への参加経験の多寡との関連について、検討していく。

（岡邑 衛）

3. 分析に用いるデータの概要と変数の設定

本稿の分析に用いるデータは、全筆者らが所属する研究グループ（日本特別活動学会内に設置された研究会、通称「社会研」）のメンバーが

2017 年 6～7 月に勤務校の大学生に対して配布した質問紙調査である。調査対象は 22 大学の学生 1828 名であり、国公立大学が 5 大学（260 名、14.2%）、私立大学が 17 大学（1566 名、85.8%）である。性別の内訳は、男子が 773 名（42.3%）、女子が 1049 名（57.4%）、無回答が 4 名（0.0%）である。回答者の学年は、最小値 1.000、最大値 4.000、平均値 1.997、標準偏差 0.793 であり、5 年次以上の学年、大学院生、科目等履修生は分析から除外している。調査の対象になった大学には地域的な偏りはほとんどないものの、厳密なサンプリングを行って調査対象を選定していないことや、回答者が若い学年に偏っていることなどには注意が必要である。

続いて、分析に用いる変数を設定する。本稿では第 1 節および第 2 節で述べたように、中学時の特別活動の参加経験と学級生活の関連性を検討していくが、その際、学級生活の中でどのようなコミュニケーションをとっていたかという変数を作成する必要がある。

そこで、中 2 時の学級生活のコミュニケーションの様子を問う 7 項目の設問（表 1）に対し、因子分析（最尤法）を行ったところ、固有値 1 以上の因子が 2 つ抽出された（表 2）。その結果から、第 1 因子は学級生活内での「自己主張」を表す因子であり、第 2 因子は「利他性」を表す因子であると判断した。本稿の分析では、この 2 つの因子得点を標準化し、コミュニケーションの 4 類型を作成したもの（図 1 参照）を従属変数に設定し、多項ロジスティック回帰分析により、どのような特別活動の経験がコミュニケーション 4 類型の規定要因になっているのかを探索的に分析を行う。

なお、分析に使用する変数は表 3 に、分析にし

表 1 中 2 時の自己認識の度数分布（有効パーセント）

	とても あてはまる	まあ あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない	合計	有効 度数
人前で話すことが得意だった (%)	14.8	31.0	38.7	15.6	100.0	(1809)
自分に自信があった (%)	8.4	24.0	45.4	22.2	100.0	(1810)
クラス全体で話し合うときに 積極的に発言していた (%)	15.6	24.3	41.1	19.0	100.0	(1807)
クラスみんなのことを考えて行動していた (%)	16.4	50.5	27.9	5.2	100.0	(1806)
クラスで困っている人がいたら 助けるようにしていた (%)	20.7	53.1	22.2	4.0	100.0	(1809)
クラスで決めたルールや約束が 自分の意に反していても守っていた (%)	20.4	51.3	23.9	4.4	100.0	(1805)
みんなが嫌がる役割でも進んで引き受けた (%)	13.1	36.2	41.9	8.8	100.0	(1805)

ようする変数の記述統計量については、表4に示してある。また、統制変数に使用する文化資本に関しては、表5に示した設問をカテゴリカル主成分分析により統合し、分析に投入する。学級規律に関しては、中2時のクラスの様子を問う設問「授

業開始後、すぐ静かになる」「授業に積極的な人が多い」「学習に集中できる環境だった」という3つの設問（4件法）を合算して作成した。なお、Cronbachの α は0.848であり、合成するには問題ないと考えられる。

表2 中2時の自己認識の構造（最尤法による因子分析）

	第1因子	第2因子
	自己主張	利他性
人前で話すことが得意だった	0.884	-0.072
自分に自信があった	0.761	-0.156
クラス全体で話し合うときに積極的に発言していた	0.677	0.203
クラスみんなのことを考えて行動していた	-0.063	0.792
クラスで困っている人がいたら助けるようにしていた	0.101	0.652
クラスで決めたルールや約束が自分の意に反していても守っていた	-0.199	0.554
みんなが嫌がる役割でも進んで引き受けた	0.188	0.525
固有値（回転後）	3.064	1.453

プロマックス回転後の因子負荷量を記載

図1 対人関係に関わるコミュニケーション4類型

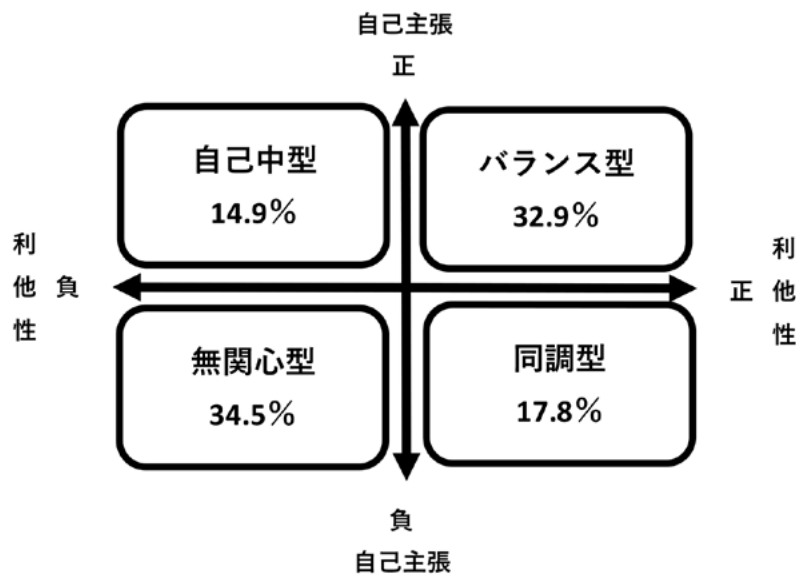


表3 分析に使用する変数の設定

【大学】国公立ダミー	在籍している大学が国公立=1, 私立=0
【大学】入試偏差値	「Benesseマナビジョン」を参考にした在籍している大学・学部の偏差値
女子ダミー	女子=1, 男子=0
【中学】三大都市圏所在ダミー	在学していた中学の所在地が埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・愛知県・京都府・大阪府・兵庫県に居住=1, それ以外の地域=0
【中学】国私立ダミー	在学していた中学が国私立=1, 公立=0
月齢	4月生まれ=12, 5月生まれ=11, 6月生まれ=10, …, 3月生まれ=1
家庭の文化資本	家庭の文化資本を表すと考えられる3つの質問項目をカテゴリカル主成分分析で統合(表5参照)
きょうだい数	きょうだいの数
【中2時】校内成績	中2時の校内成績の自己認識が上のほう=5, 中の上=4, 中=3, 中の下=2, 下のほう=1
【中2時】運動部所属ダミー	中2時運動部に所属=1, それ以外=0
【中2時】文化部所属ダミー	中2時文化部に所属=1, それ以外=0
【中2時】クラス内男子友人数	中2時の「クラス内の男子の友人数」に「いなかった」と回答=0, 「1~3人」=2, 「4~6人」=5, …, 「13人以上」=14
【中2時】クラス内女子友人数	中2時の「クラス内の男子の友人数」に「いなかった」と回答=0, 「1~3人」=2, 「4~6人」=5, …, 「13人以上」=14
【中2時】学級規律	中2時のクラスの様子と問う設問「授業開始後、すぐ静かになる」「授業に積極的な人が多い」「学習に集中できる環境だった」(4件法)という3つの設問(4件法)を合算
【中学】健康・体育的行事積極的参加割合(10%単位)	中学時の「運動会・体育祭など健康に関わる学校行事に積極的に参加している生徒」の割合について、「ほぼ全員」と回答=10, 「7~8割くらい」=7.5, 「半分くらい」=5.0, 「2~3割くらい」=2.5, 「ほとんどいなかった」=0
【中学】文化行事積極的参加割合(10%単位)	中学時の「合唱コンクール・文化祭など文化に関わる学校行事に積極的に参加している生徒」の割合について、「ほぼ全員」と回答=10, 「7~8割くらい」=7.5, 「半分くらい」=5.0, 「2~3割くらい」=2.5, 「ほとんどいなかった」=0
【中学】校外行事積極的参加割合(10%単位)	中学時の「遠足・自然教室・修学旅行など郊外での学校行事に積極的に参加している生徒」の割合について、「ほぼ全員」と回答=10, 「7~8割くらい」=7.5, 「半分くらい」=5.0, 「2~3割くらい」=2.5, 「ほとんどいなかった」=0
【中学】奉仕・職場体験積極的参加割合(10%単位)	中学時の「奉仕(ボランティア)活動や職場体験活動などの学校行事に積極的に参加している生徒」の割合について、「ほぼ全員」と回答=10, 「7~8割くらい」=7.5, 「半分くらい」=5.0, 「2~3割くらい」=2.5, 「ほとんどいなかった」=0
【中学】委員会・生徒会積極的参加割合(10%単位)	中学時の「委員会活動や生徒会活動」の割合について、「ほぼ全員」と回答=10, 「7~8割くらい」=7.5, 「半分くらい」=5.0, 「2~3割くらい」=2.5, 「ほとんどいなかった」=0
【中2時】健康・体育的行事積極的参加ダミー	中学時の「運動会・体育祭など健康に関わる学校行事」について「かなり積極的に参加していた」と回答=1, それ以外=0
【中2時】文化行事積極的参加ダミー	中学時の「合唱コンクール・文化祭など文化に関わる学校行事」について「かなり積極的に参加していた」と回答=1, それ以外=0
【中2時】校外行事積極的ダミー	中学時の「遠足・自然教室・修学旅行など郊外での学校行事」について「かなり積極的に参加していた」と回答=1, それ以外=0
【中2時】奉仕・職場体験積極的参加ダミー	中学時の「奉仕(ボランティア)活動や職場体験活動などの学校行事」について「かなり積極的に参加していた」と回答=1, それ以外=0
【中2時】委員会・生徒会積極的ダミー	中学時の「委員会活動や生徒会活動」の「について「かなり積極的に参加していた」と回答=1, それ以外=0

表4 分析に使用する変数の記述統計量

	有効度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
【大学】国公立ダメー	1826	0.000	1.000	0.142	0.350
【大学】入試偏差値	1820	43.750	73.000	55.358	7.194
女子ダメー	1822	0.000	1.000	0.576	0.494
【中学】三大都市圏所在ダメー	1814	0.000	1.000	0.659	0.474
【中学】国私立ダメー	1814	0.000	1.000	0.128	0.335
月齢	1797	1.000	12.000	6.630	3.450
家庭の文化資本	1736	-1.308	2.310	0.000	1.000
きょうだい数	1826	0.000	7.000	1.312	0.848
【中2時】校内成績	1816	1.000	5.000	3.393	1.251
【中2時】運動部所属ダメー	1821	0.000	1.000	0.681	0.466
【中2時】文化部所属ダメー	1821	0.000	1.000	0.250	0.433
【中2時】クラス内男子友人数	1808	0.000	14.000	8.269	5.147
【中2時】クラス内女子友人数	1807	0.000	14.000	9.058	4.737
【中2時】学級規律スコア	1800	1.000	10.000	5.776	2.144
【中学】健康・体育的行事積極的参加割合 (10%単位)	1802	0.000	10.000	7.494	2.196
【中学】文化行事積極的参加割合 (10%単位)	1802	0.000	10.000	7.188	2.344
【中学】校外行事積極的参加割合 (10%単位)	1802	0.000	10.000	7.959	2.137
【中学】奉仕・職場体験積極的参加割合 (10%単位)	1799	0.000	10.000	5.356	2.918
【中学】委員会・生徒会積極的参加割合 (10%単位)	1795	0.000	10.000	5.508	2.612
【中2時】健康・大域的行事積極的参加ダメー	1802	0.000	1.000	0.475	0.500
【中2時】文化行事積極的参加ダメー	1807	0.000	1.000	0.463	0.499
【中2時】校外行事積極的ダメー	1799	0.000	1.000	0.486	0.500
【中2時】奉仕・職場体験積極的参加ダメー	1683	0.000	1.000	0.254	0.435
【中2時】委員会・生徒会積極的ダメー	1656	0.000	1.000	0.292	0.455

表5 変数「家庭の文化資本」の作成（カテゴリカル主成分分析）

		数量化	成分負荷量
実家に「地球儀」	あった	1.312	0.595
	なかった	-0.762	
実家に「ピアノ」	あった	0.963	0.700
	なかった	-1.039	
実家に「美術品」	あった	2.026	0.606
	なかった	-0.494	
中2時の習い事 (塾・家庭教師以外)	していた	1.248	0.422
	していなかった	-0.801	
寄与率		34.8%	

4. 分析結果

本節では、第3節で設定した統制変数をコントロールした上で、中学時の特別活動の経験がコミュニケーション4類型にどのような影響を与えているのかを分析する。また前述したように特別活動は活動内容が多様なため、可能な活動内容を限り切り分けた分析を行っていく。

具体的には、まずは表6で統制変数のみがコミュニケーション4類型に与える影響を確認し、表7で「健康・体育的行事」の経験、表8で「文化的行事」の経験、表9で校外行事の経験、表10で奉仕・職場体験行事の経験、表11で委員会・生徒会の経験を独立変数として分析を行っていく。

表6 コミュニケーション4類型の規定要因(多項ロジスティック回帰分析)(基準:無関心型)

	バランス型		自己中型		同調型	
	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比
【大学】国公立ダメー	0.083	1.087	0.382	1.466	-0.460	0.631
【大学】入試偏差値	0.000	1.000	0.022	1.022	0.011	1.011
女子ダメー	-0.377	0.686 *	-0.527	0.591 *	0.070	1.073
【中学】三大都市圏所在ダメー	0.133	1.142	-0.165	0.848	-0.088	0.916
【中学】国私立ダメー	-0.022	0.978	0.607	1.835 **	-0.241	0.786
月齢	0.063	1.065 **	0.025	1.025	0.017	1.018
家庭の文化資本	0.218	1.244 **	0.156	1.169	0.003	1.003
きょうだい数	0.045	1.046	0.010	1.010	-0.024	0.976
【中2時】校内成績	0.456	1.578 ***	0.186	1.205 **	0.126	1.134
【中2時】運動部所属ダメー	0.469	1.598	0.527	1.694	0.777	2.175 **
【中2時】文化部所属ダメー	0.243	1.275	0.289	1.336	0.759	2.136 *
【中2時】クラス内男子友人数	0.086	1.090 ***	0.072	1.075 ***	0.015	1.016
【中2時】クラス内女子友人数	0.101	1.106 ***	0.063	1.065 **	0.047	1.048 *
【中2時】学級規律	0.191	1.210 ***	-0.006	0.994	0.153	1.165 ***
(定数)	-5.099	***	-4.080	***	-3.739	***
-2対数尤度	3930.690					
自由度調整済み決定係数	0.238					
尤度比のカイ2乗検定	カイ2乗値 409.062 有意確率 0.000					
有効度数	1637					

(*: $p < 0.05$, **: $p < 0.01$, ***: $p < 0.001$)表7 コミュニケーション4類型の規定要因(多項ロジスティック回帰分析)
健康・体育的行事の効果の検証(基準:無関心型)

	バランス型		自己中型		同調型	
	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比
【大学】国公立ダメー	0.281	1.324	0.510	1.665 *	-0.352	0.703
【大学】入試偏差値	0.002	1.002	0.024	1.024 *	0.015	1.015
女子ダメー	-0.402	0.669 *	-0.544	0.580 **	0.073	1.076
【中学】三大都市圏所在ダメー	0.140	1.150	-0.153	0.858	-0.092	0.912
【中学】国私立ダメー	-0.015	0.985	0.620	1.859 **	-0.212	0.809
月齢	0.057	1.059 **	0.021	1.021	0.013	1.013
家庭の文化資本	0.196	1.217 **	0.140	1.151	-0.028	0.973
きょうだい数	-0.022	0.978	-0.026	0.974	-0.067	0.936
【中2時】校内成績	0.455	1.576 ***	0.183	1.201 *	0.115	1.122
【中2時】運動部所属ダメー	0.190	1.209	0.358	1.431	0.605	1.831 *
【中2時】文化部所属ダメー	0.360	1.433	0.298	1.347	0.765	2.148 *
【中2時】クラス内男子友人数	0.060	1.061 **	0.057	1.059 **	0.006	1.006
【中2時】クラス内女子友人数	0.079	1.082 ***	0.052	1.053 *	0.034	1.035
【中2時】学級規律	0.159	1.172 ***	-0.018	0.982	0.136	1.146 ***
【中学】健康・体育的行事積極的参加割合 (10%単位)	0.080	1.083 *	0.053	1.055	0.067	1.069
【中2時】健康・体育的行事積極的参加ダメー (定数)	1.797	6.031 ***	0.824	2.279 ***	0.803	2.232 ***
(定数)	-5.758	***	-4.398	***	-4.202	***
-2対数尤度	3734.702					
自由度調整済み決定係数	0.319					
尤度比のカイ2乗検定	カイ2乗値 571.894 有意確率 0.000					
有効度数	1625					

(*: $p < 0.05$, **: $p < 0.01$, ***: $p < 0.001$)

表8 コミュニケーション4類型の規定要因（多項ロジスティック回帰分析）
文化的行事の効果の検証（基準：無関心型）

	バランス型		自己中型		同調型				
	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比			
【大学】国公立ダミー	0.120	1.127	0.402	1.494	-0.430	0.651			
【大学】入試偏差値	0.000	1.000	0.021	1.021	0.011	1.011			
女子ダミー	-0.539	0.583	**	-0.599	0.549	**	0.000	1.000	
【中学】三大都市圏所在ダミー	0.194	1.214		-0.145	0.865		-0.072	0.930	
【中学】国私立ダミー	0.054	1.056		0.659	1.933	**	-0.196	0.822	
月齢	0.058	1.060	**	0.023	1.023		0.015	1.015	
家庭の文化資本	0.182	1.200	*	0.145	1.156		-0.016	0.984	
きょうだい数	0.029	1.030		0.008	1.008		-0.029	0.971	
【中2時】校内成績	0.401	1.494	***	0.149	1.161	*	0.092	1.096	
【中2時】運動部所属ダミー	0.401	1.493		0.471	1.602		0.710	2.033	*
【中2時】文化部所属ダミー	0.039	1.039		0.179	1.197		0.632	1.882	*
【中2時】クラス内男子友人数	0.072	1.075	***	0.065	1.067	**	0.009	1.009	
【中2時】クラス内女子友人数	0.090	1.094	***	0.058	1.059	**	0.040	1.041	
【中2時】学級規律	0.157	1.170	***	-0.008	0.992		0.138	1.148	***
【中学】文化行事積極的参加割合（10%単位）	0.028	1.028		-0.014	0.986		0.012	1.012	
【中2時】文化行事積極的参加ダミー （定数）	1.762	5.826	***	0.855	2.352	***	0.928	2.529	***
-2対数尤度	3756.473								
自由度調整済み決定係数	0.315								
尤度比のカイ2乗検定	カイ2乗値 564.781 有意確率 0.000								
有効度数	1630								

(* : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$, *** : $p < 0.001$)

表9 コミュニケーション4類型の規定要因（多項ロジスティック回帰分析）
校外行事の効果の検証（基準：無関心型）

	バランス型		自己中型		同調型				
	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比			
【大学】国公立ダミー	0.225	1.252		0.512	1.669	*	-0.336	0.715	
【大学】入試偏差値	0.002	1.002		0.024	1.024	*	0.013	1.013	
女子ダミー	-0.376	0.686	*	-0.526	0.591	*	0.068	1.070	
【中学】三大都市圏所在ダミー	0.205	1.228		-0.114	0.892		-0.018	0.982	
【中学】国私立ダミー	-0.032	0.968		0.575	1.778	*	-0.243	0.785	
月齢	0.060	1.062	**	0.024	1.024		0.017	1.017	
家庭の文化資本	0.184	1.202	*	0.142	1.153		-0.017	0.983	
きょうだい数	0.021	1.021		-0.025	0.975		-0.042	0.958	
【中2時】校内成績	0.426	1.531	***	0.165	1.179	*	0.111	1.117	
【中2時】運動部所属ダミー	0.356	1.428		0.411	1.509		0.690	1.994	*
【中2時】文化部所属ダミー	0.337	1.401		0.337	1.400		0.789	2.202	*
【中2時】クラス内男子友人数	0.075	1.078	***	0.065	1.067	**	0.009	1.009	
【中2時】クラス内女子友人数	0.079	1.082	***	0.043	1.044		0.032	1.032	
【中2時】学級規律	0.159	1.173	***	-0.024	0.976		0.122	1.130	***
【中学】校外行事積極的参加割合（10%単位）	0.035	1.036		0.055	1.057		0.112	1.118	**
【中2時】校外行事積極的参加ダミー （定数）	1.540	4.663	***	0.936	2.549	***	0.634	1.886	***
-2対数尤度	3766.695								
自由度調整済み決定係数	0.301								
尤度比のカイ2乗検定	カイ2乗値 532.658 有意確率 0.000								
有効度数	1622								

(* : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$, *** : $p < 0.001$)

表 10 コミュニケーション 4 類型の規定要因（多項ロジスティック回帰分析）
奉仕・職場体験の効果の検証（基準：無関心型）

	バランス型		自己中型		同調型	
	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比
【大学】国公立ダメー	0.190	1.209	0.421	1.523	-0.472	0.624
【大学】入試偏差値	0.007	1.007	0.021	1.021	0.012	1.012
女子ダメー	-0.405	0.667 *	-0.590	0.554 *	0.010	1.010
【中学】三大都市圏所在ダメー	0.227	1.255	-0.156	0.855	-0.057	0.945
【中学】国私立ダメー	0.238	1.269	0.710	2.035 **	0.019	1.019
月齢	0.056	1.058 **	0.021	1.022	0.014	1.014
家庭の文化資本	0.186	1.205 *	0.134	1.143	-0.015	0.985
きょうだい数	-0.005	0.995	0.040	1.041	-0.019	0.981
【中2時】校内成績	0.489	1.630 ***	0.225	1.253 **	0.183	1.201 **
【中2時】運動部所属ダメー	0.383	1.466	0.494	1.639	0.725	2.064 *
【中2時】文化部所属ダメー	0.249	1.283	0.309	1.362	0.701	2.016 *
【中2時】クラス内男子友人数	0.088	1.092 ***	0.073	1.075 **	0.014	1.014
【中2時】クラス内女子友人数	0.098	1.103 ***	0.062	1.064 **	0.048	1.049 *
【中2時】学級規律	0.161	1.175 ***	-0.005	0.995	0.124	1.132 **
【中学】奉仕・職場体験積極的参加割合 (10%単位)	0.044	1.046	-0.001	0.999	0.037	1.038
【中2時】奉仕・職場体験積極的参加ダメー (定数)	1.493	4.452 ***	0.478	1.612 *	0.653	1.922 **
	-5.899	***	-4.218	***	-3.975	***
-2対数尤度	3566.646					
自由度調整済み決定係数	0.290					
尤度比のカイ 2 乗検定	カイ2乗値 478.644 有意確率 0.000					
有効度数	1525					

(* : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$, *** : $p < 0.001$)

表 11 コミュニケーション 4 類型の規定要因（多項ロジスティック回帰分析）
委員会・生徒会の効果の検証（基準：無関心型）

	バランス型		自己中型		同調型	
	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比
【大学】国公立ダメー	0.151	1.163	0.459	1.583	-0.475	0.622
【大学】入試偏差値	-0.001	0.999	0.021	1.021	0.006	1.006
女子ダメー	-0.649	0.523 ***	-0.752	0.471 ***	-0.142	0.867
【中学】三大都市圏所在ダメー	0.244	1.277	-0.120	0.887	-0.119	0.887
【中学】国私立ダメー	0.135	1.145	0.687	1.988 **	-0.272	0.762
月齢	0.048	1.050 *	0.024	1.024	0.013	1.013
家庭の文化資本	0.271	1.311 ***	0.180	1.197 *	0.036	1.037
きょうだい数	0.032	1.032	0.068	1.071	0.007	1.007
【中2時】校内成績	0.368	1.445 ***	0.100	1.105	0.099	1.104
【中2時】運動部所属ダメー	0.487	1.628	0.484	1.622	0.784	2.190 *
【中2時】文化部所属ダメー	0.345	1.412	0.350	1.419	0.880	2.410 *
【中2時】クラス内男子友人数	0.068	1.071 **	0.068	1.070 **	0.001	1.001
【中2時】クラス内女子友人数	0.106	1.112 ***	0.059	1.061 *	0.057	1.059 *
【中2時】学級規律	0.170	1.185 ***	-0.002	0.998	0.126	1.135 **
【中学】委員会・生徒会積極的参加割合 (10%単位)	0.000	1.000	-0.051	0.951	0.017	1.017
【中2時】委員会・生徒会積極的参加ダメー (定数)	2.469	11.813 ***	1.501	4.487 ***	1.160	3.189 ***
	-4.913	***	-3.532	***	-3.245	***
-2対数尤度	3388.002					
自由度調整済み決定係数	0.343					
尤度比のカイ 2 乗検定	カイ2乗値 571.930 有意確率 0.000					
有効度数	1490					

(* : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$, *** : $p < 0.001$)

以上の結果を見ると、まずは表6より学級規律がコミュニケーションの類型に大きな影響を与えていることが確認できる。よって、学級規律を統制した上でも、なお特別活動の経験が、コミュニケーション類型へ影響を与えているかどうかを確認する。

表7～11を見ると、「無関心型」を基準にすると、今回独立変数として設定したすべての活動積極的ダミーが「バランス型」へ有意な影響を与えていることがわかる。また、その中でも委員会・生徒会のオッズ比が高く、委員会・生徒会に積極的に取り組んでいたと回答している大学生ほど、中学時に「バランス型」のコミュニケーションをとっていたと回答していることが明らかになった。なお、校外行事や奉仕・職場体験の参加は、それらに比べてオッズ比が低いことも確認された。

(鈴木 翔)

5. まとめと今後の考察

本稿では、大学生へ中学時の特別活動の活動経験と当時のコミュニケーションを尋ねた質問紙調査の分析から、今回設問に用いたすべての特別活動の経験が、「バランス型」のコミュニケーションへ有意な影響を与えていることを確認した。

しかし、この「バランス型」のコミュニケーションをめぐる、以下の点に留意が必要である。

第一に、昨今多様な非認知的な能力観が提示されているが、2018年時点の大学生が中学校第二年次であった5～8年ほど前の特別活動実践にも学級生活態度が「バランス型」へ移行する機能があった可能性が認められる点は再度強調してもよいだろう。さまざまな論者から、特別活動を中心に既存の教育課程に非認知能力育成に関わる活動が含まれてきたと指摘があるが、第2節で示したように、特別活動によって獲得される資質・能力を帰納的に明らかにした研究自体が少なく、児童・生徒の資質・能力獲得の様態を明らかにすることの肝要性は指摘するまでもない。同時に、大学生等の回想も特別活動の実践史として再考し、今後新たに必要とされる能力の新規性の判断材料として蓄積する必要がある。

第二に、本稿では便宜的に「無関心型」から「バランス型」へ移行する契機に着目したが、昨今重視される教科学習も含めた評価の観点からみた場

合、学級生活態度が「バランス型」であることを盲目的に理想化することには留意が必要である。アクティブ・ラーニング等の双方向的な教育方法下では、児童・生徒には教科の学習過程でも自己主張的でもあり、利他的でもあるような態度が求められることになる。したがって、特別活動で育成すべき資質・能力について考察する際は、それと教科で育成すべきとされる資質・能力が接近し、ひいては教育現場において生徒指導と学習指導上の評価が一元化しやすくなる可能性を合わせ見ていくことになるだろう。

第三に、3.でも説明しているが、今回の分析対象者は、大学生であり、中学校卒業から最低でも3年以上経過していることにも注意が必要である。その後の経験によって、中学時の特別活動の過去の経験が美化されたり、そのほかの経験から影響を受けたりして今回の傾向が導き出された可能性は否定できない。四年制大学以外の進路を選択した人も合わせ、追って分析する必要があるだろう。

これらの点を今後の課題としたい。

(歌川光一)

【付記】本研究はJSPS 科研費 16H05923, 18K025485 の助成を受けたものです。

【注】

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領」・「中学校学習指導要領」(平成29年3月31日公示)、「高等学校学習指導要領」(平成30年3月31日公示)。
- 2) 望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸張を図り、集団(や社会)の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを(人間としての[在り方])生き方についての自覚を)深め、自己を生かす能力を養う。なお、小,中,高等学校学習指導要領()内は中学校, []内は高等学校を表す。
- 3) 文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)』東山書房,平成29年3月,p.162。集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。

- (1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。
- (2) 集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。
- (3) 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。
- 4) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』東山書房、平成29年7月、p.6。
- 5) 同上、p.3。「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、ア「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」、イ「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、ウ「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」の三つの柱に整理する。
- 6) 科学研究費補助金基盤研究(C) 22531040 報告書『特別活動における発達課題と評価についての研究』2013年3月。本研究では、小中高等学校において、特別活動が継続的、系統的に育てるべき子どもの発達段階的な能力・態度と、その育成方法ならびに評価を明らかにするために、理論研究、調査研究、ならびに実践研究を行った。調査については、近畿圏の大学校ならびに小学校、中学校、高等学校を研究協力校とした。また、フィールド

調査や質問紙調査等を通して、その成果と課題を整理するとともに、特別活動で育つ能力、態度とその指導方法等を探った。研究代表者：佐々木正昭、本文188頁、資料46頁、／全234頁。

【文献】

- 林尚示・安井一郎・鈴木樹ほか、2018、「特別活動で社会的資質を育成するための指導内容と指導方法の開発に関する基礎研究(3)——学級活動を事例として」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』Vol.69, no.1, pp.69-79.
- 木内隆生、1999、「特別活動で育成される資質・能力に関する研究」『生徒指導研究』第2号, pp.4-24.
- , 2007,「高等学校特別活動で育成される合意形成力——協創体過程の実践化に向けて」『九州女子大学紀要』第44巻3号, pp1-15.
- 中村豊、2010,「特別活動と生徒指導」『教育学論究』第2号, pp.115-26.
- , 2011,「特別活動で育てる社会的資質・能力に関する研究——大学生の振り返りアンケート調査を通して」『関西教育学会年報』通巻第35号, pp.131-5.
- , 2015,「児童生徒の社会的能力の育成に関する調査研究——特別活動の機能に着目した分析」『教育学論究』第7号, pp.131-43.
- 佐々木正昭編著、2014,『入門特別活動』学事出版, pp.9-10.
- 山本景一・藤田英治、2015,「社会的実践力を育む特別活動——生活科や総合的な学習の時間との関連を図った特別活動のあり方」『プール学院大学研究紀要』第56号, pp247-60.